

<報告>変わりゆく北京の路地

——中国現代文学館・史家胡同博物館を訪ねて

● 池 上 貞 子

筆者は2013年度中、跡見学園女子大学研究助成金を得て、英文学専門の内藤歆修教授との共同研究「中英閨秀文学の比較考察」のプロジェクトを実行した。その一環として、8月に英国を訪れ、主としてジェーン・オースチンに関わる足跡を訪ねて資料を収集した。その後、中国文学に関連して、9月に北京・上海を訪れ、北京では主として凌叔華¹について、上海では張愛玲²について調査および資料収集を行なった。こうしたフィールドワークの成果を取り入れた論文の完成までにはもうしばらく時間が必要なため、今回は関連の新しい動向が見られた北京の二機関、すなわち中国現代文学館および史家胡同博物館訪問について報告することにした。

1 中国現代文学館

北京での主要調査機関を中国現代文学館としたのは、1つには一般的な意味で中国文学全体にかかわる新しい動向をさぐるためであるが、もう1つの理由は、このプロジェクトで扱おうとしている凌叔華関連の資料が当館に収められていると、何かの資料で読んだからである。ちなみにこの文学館は、作家の巴金³が文化大革命の傷痕がまだ癒えきらない時期に来日した時、東京駒場の日本近代文学館（ちなみに、中国語の現代文学は日本語の近代文学に相応）を訪れ、中国でも同様の施設の設立が必要だと考えて、1981年にその設立を提唱したと言われる。1985年1月に、まずかつて清朝の聖地、特に皇族が夏の避暑地の1つである頤和園へ行く途中の休憩場所として利用したと言われる万寿寺⁴に仮住まいの形で事務機関が置かれた。筆者も何度か訪れたことがあるが、小規模ながら歴史的建造物としての風格があり、味わい深いものがあった。

そして6年の歳月を費やして、2000年5月、ついに現在の地点に新しい建物が完成した。同館は中国現代文学の資料センターと位置づけられ、文学に関わる博物館、図書館、書類保存館、そ

1 凌叔華（1900—90）北京生まれ。幼年期より高名な師について、中国画を学ぶ。1920年代、燕京大学在学中、文学創作開始。「現代評論派」の陳源（陳西滢）と結婚。若い女性の心理を描いた短編「酒の後」「花の寺」「刺繍の枕」などを書き、新閨秀派という呼び名もあった。日中戦争時期にいた武漢大学で、イギリスの女性作家ヴァージニア・ウルフの甥のジュリアン・ベルと親しくなり、ウルフとの文通につながる。1940年代半ばにヨーロッパに渡り、後にイギリスに定住。1953年に英語の自伝小説 *Ancient Melodies* を出版した。1989年末、40年ぶりに帰国。翌年、北京で死去した。

2 張愛玲（1920—95）上海生まれ。1940年代前半、日本占領下の上海で、政治性を避けた鋭い人間観察と心理描写を特徴とする小説やエッセイをたくさん発表した。50年代に香港を経てアメリカへ移住。代表作に「傾城の恋」、「金鎖記」などがある。

3 巴金（1904—2005）中国近現代文学を代表する作家の1人。四川省成都の人。本名は李堯棠（りぎょうとう）。五四運動の影響を受け、アナーキズムに共鳴。フランス留学。代表作は「家」、「憩園」、「寒夜」などで、晩年の随想録も有名。日本語訳も多数ある。

4 万寿寺：明の万曆年間（1577）に建立。清代には寺院と廟、庭園、行宮が一体となった皇宮の仏教の聖地とされた。現在は古代の貴重な芸術品、とくに清朝皇族の親筆書画が収蔵されていることで有名。1985年に北京芸術博物館として対外開放された。

して交流の場としての機能を有していて、資料研究、理論研究が行なわれている。具体的には、近現代作家の著作、自筆原稿、翻訳書、書簡、日記、録音・録画資料などの保存管理がなされ、さらに関連の著作や評論・定期刊行物・新聞などの収集、保管、整理、研究が行なわれているようだ。

中国社会では何かにつけて紹介者のあることが大事なので、事前に北京在住の友人A経由で凌叔華について調べたいと思っていることを文学館に伝えてもらった。詳細に言えば、Aが研究会仲間である中国社会科学院研究員のBに相談し、Bが当の文学館所属で凌叔華に関する著書のあるC氏に紹介。当日、筆者らはAに伴われて、文学館およびC氏を訪問したという次第だ。ついながら、さらに内情を話すなら、50代の女性大学教員のAは、筆者が30年前に天津の大学で日本語を教えていた時の学生で、通算すると3年半くらい、東京女子大学大学院への留学経験がある。研究テーマは大庭みな子で、最近博士号を取得した。Bは90年代に2年間、東京大学で訪問研究者として過ごし、現在でもしばしば日本を訪れている気鋭の中国文芸評論家である。そして、インタビューが始まってから分かったのであるが、Cというのは凌叔華が1953年にロンドンのThe Hogarth Press Ltd. から出版した*Ancient Melodies*を中国語に翻訳（『古韻』台北・業強出版社、1991年9月初版）し、彼女に関する著作も多い傅光明氏であった。

当館の研究員である傅氏は、館の刊行物『中国現代文学研究叢刊』の常務副主編、中国現代文学研究会理事、中国老舍研究会副会長などの肩書きをもつ、多忙な人であった。対談中にもしばしばケータイ電話が鳴ったり、直接、呼び出されたりしていた。余談だが、先に紹介したB氏もちょうど外国へ出張中で会えず、とにかく中国全体が動態にあるという感じを受けた。氏との話し合いの中で、凌叔華関連の資料があるという筆者の認識は誤りで、凌叔華の蔵書の一部を保管しているだけというのが、真実のようだった。その代わりというわけではないだろうが、その時まだ建築中だった（その後、10月18日に一般公開）記念館をオープン前ではあるが、特別に見学させてもらえることになった。

インタビューの後、ちょうど展示されていた「中国現当代文学展」という企画展を見てまわった。これが現在の中国の公的な近現代文学史ということなのだろうと思うので、おさらいがてら、ざっと以下に紹介する。まず最初の「序幕：20世紀文学革命前奏」では19世紀末から20世紀にかけて行なわれた<詩界革命>、<文界革命>、<小説界革命>そして白話文推進などをキーワードに、梁啓超、黄遵憲、康有為などが取り上げられていた。「第一部：五四文学革命」（1917-1927）では、日本でもよく知られている<魯迅>、<郭沫若>とともに、<‘五四’初期の文学創作>、<文学結社と流派>、<初期の話劇運動>という5つのコーナーが設けられていた。「第二部：左翼および進歩的文学の勃興」（1927-1937）は<中国左翼作家連盟>と<民主主義文学>で、中国近現代文学を代表する巴金、老舍、曹禺、沈從文、丁玲など多数の作家がここで紹介されていた。「第三部：戦火の洗礼の中の文学」（1937-49）は日中戦争およびそれに続く国共内戦時代で、<国民党支配区の文学>、<淪陷区（日本占領地区）の文学>、<解放区（共産党支配区）の文学>となっていた。ちなみに当時の凌叔華はこの分け方で言えば、<国民党支配区の文学>、また上海での調査対象である張愛玲は<淪陷区の文学>に入る。「第四部：社会主義新中国文学」（1949-77）は新中国成立から反右派闘争（1957）やプロレタリア文化大革命（1966-76）など大きな政治闘争を経ながら、いわゆる“人民文学”を主眼としていた時代の文学で、<小説>、<話劇と歌劇>、<報告文学（ルポルタージュ）>、<散文と雑文>、<詩歌>、<児童文学>、<文芸理論と批評>の7つのコーナーが設けられていた。「第五部：新時期文学の繁栄」（1978-1999）は<百花咲き誇る大陸文学>、<錦の如き花の台湾・香港・澳門および海外中国語文壇>

となっていて、大陸における文学のグローバル化、逆から見れば大陸以外の中国語文学の取り込みとも受けとれた。「第六部：21世紀を邁進する文学」（2000—）は〈切なる願い〉、〈優秀作品を激励し、文学の新人を助成〉、〈新しい文学思潮と文学現象〉、〈中国文学を世界に向かわせよ〉の5つのコーナーがあった。最後のセクションは今日のグローバル化に対応した組み立てになっていたと思うが、一方ではそれまでの純粋な文学的展示と雰囲気はやや異なり、少し政治的な配慮がなされているような印象も受けた。

2 史家胡同博物館

もう1つの凌叔華故居跡に造られたという博物館は、朝陽区の史家胡同（胡同は路地の意味）にあるらしい。3時間近く余裕のある午後2時に見学のアポイントメントが取れた。だが、せっかくだから移動の途中にある、雍和宮という有名なラマ教寺院も駆け足で参観しよう、ついでに近辺で名物の精進料理も味わってみようと、欲張ったのがあだになった。最寄りの灯市口という地下鉄の駅からは思いのほか遠く、また路地の周辺の伝統的な家並みやたたずまいに1つ1つ反応していたため意外に時間がかかり、約束の時間に遅れてしまった。すると地区の職員のような人がじりじりしながら待ち受けていて、これから鍵を持っている現場責任者に連絡をとって、門を開けてもらわなければならないと告げられた。我々一行は、路地に立って周辺の家や小商店などを見ながら待ったが、なかなかうまく連絡がつかない様子だった。そこで好奇心のおもむくまま、向かい側の、今は公の施設になっているらしい伝統な屋敷の中に恐る恐る足を踏み入れてみた。と、すぐに合唱の歌声や伝統楽器の音色、講演・講義口調の話し声などが耳に届いてきた。門の内側の受付のようなところに立たずんでいた人たちの話によると、ここは昔は要人の邸であったが、今は地区の老人クラブになっていて、当日も様々な活動が行なわれているのだとのこと。中心になって説明している人が責任者らしく、こうした活動についての筆者らの質問に嫌がらずに答えてくれた。同じような活動を行なっている日本の地域社会団体と連絡があり、自身も群馬県富岡市へ交流訪問に行ったことがあるということだった。

そうこうするうち、およそ3時半ごろになっていただろうか、鍵を持った人が戻って来たとお呼びがかかったので、向かいの工事現場に戻った。すでに10名以上の工事関係者らしい男たちが作業を開始していた。みな何となく顔が赤いのは、恐らく昼ごはんの時、アルコールを入れたのだろう。責任者らしい人が平謝りに謝りながら、約束の2時まで食事に行かず待っていたのだけれど、という意味のことをしきりに言った。中間にいろいろな人が介在して、詳しい事情が分からないまま呑気にやってきて、迷惑をかけたのは我々の方だった。だいたい未完の建築現場に、直接の関係者ではない人間が訪れること自体、現場で働く人たちにとってはた迷惑な話であるのは想像できる。そう考えたら、1時間半近く待たされた怒りも薄れた。

改築中の建物は、もともとは清末の有力な官僚であった凌叔華の父親⁵が、1926年に彼女が陳源⁶と結婚した時、ふたりに結婚祝いとして贈った2棟の庭園付き家屋で、新中国になってからは長いあいだ、地域の幼稚園として使われていた。それが、伝統的な北京の地域社会を復活させ

5 凌福彭（1859—？） 典型的な昔の文人で、書画にも優れる。科挙に合格して「進士」となり、清末には北京近辺の行政区の長として、民国になってからも「約法議員」としてしばらく政治に係わった。前後、6人の妻をもったとされ、凌叔華の母は第4夫人だったという。

6 陳源（陳西滢）（1896—1970） 10代よりイギリス留学、1922年にロンドン大学で学位取得後、帰国。北京大学教授。雑誌『現代評論』を刊行。当時、保守派として魯迅の論敵であったため、長らく否定的な評価がなされた。27年に凌叔華と結婚。武漢大学教授を経て、43年に渡欧したままになった。

る動きと、彼女の歴史的な位置づけの見直しとを合体させて、伝統的な街並みの雰囲気を残す「史家胡同博物館」とし、一部を凌叔華記念館ということにしたらしい。このプロジェクトは「英国王儲慈善基金会（中国）」【The Prince's Charities Foundation（China）】の助成金を受けているということだった。凌叔華夫妻が新中国成立後も40年近くイギリスに暮らしていたことと関係があるのだろうか。

門の中に入ると、まず四阿のような見える屋根つきの壁があり、凌叔華がイギリス時代に書いた有名な蘭や竹の中国絵がはめ込まれていた。その傍らには、『古韻』の挿絵としても有名な、彼女が1952年にロンドンで描いた父の屋敷の全体図の中国風スケッチがガラス絵のパネルになっていた。正面は右手に細長くのびた木造家屋で（参観中、展示室だと分かった）、右手奥の突き当たりには受付とか小休止できる場所、あるいは売店になれそうな建物があり、その手前を左奥に曲がるようになっていた。そこを曲がるとすぐ満月型の門があり、その先にもう一棟、先ほどの手前と同じような細長い建物があった。そこが展示室本体で、一部は凌叔華関係の展示、一部は史家胡同の著名人展と表示されていた。そして、口の字の下線の真ん中から左にたどって行き、最後の縦線に当たる部分では、すでに地域の住民の1950年代から現代への変化がわかる家具や日用品の展示がされていた。途中には、当時の地域一帯を復元した模型もあった。ただ、凌叔華関係の展示品はまだ搬入前だったので、レイアウトは理解できたものの、あまりよくイメージできなかった。いずれにせよ文学スポットとしてより、歴史スポットとして伝統的家屋保存に力点が置かれているようだった。

インターネットでも紹介されているいくつかの情報によると、そもそも北京東城区にあるこの史家胡同は現存する胡同の中でも有名で、500メートル以内に史家小学校の校舎、人民芸術劇院の宿舎、そして多くの著名人の故居があることで知られている。その中の史家胡同24号が凌叔華の故居というわけだ。敷地は1000平米あまりあるそうで、修築には2年あまりを費やした。8つの展示室に分かれ、現物、図、模型などによって胡同全体の変化と元の所有者である凌叔華について紹介することを目的としている。博物館そのものの題辞は著名作家老舎⁷の息子で、かつて中国現代文学館の館長も務めた舒乙氏の手による。そして博物館の具体的な管理事務はこの胡同のある朝陽門街道弁公処（街道は町内会と日本の市町村や区の出張所の両方を合わせたような機能をもつ）に任されているようだ。

いずれにせよ、筆者らが帰国後一カ月あまりたったとき、ネットの北京ニュースに「胡同博物館が開館 古い町並みを再現」という記事が載った。

北京市東城区史家胡同24号に、10月18日（金）、市で初となる胡同博物館が開館した。同館は、20世紀初頭に活躍した女流作家・凌叔華の故居を改装し、約1000平方メートルの敷地に8つの展示ホールを設置、史家胡同の変遷を紹介する。

また、館内には1950、60年代と70、80年代の住宅の様子を再現した2つの部屋を設け、足踏みシンや白黒テレビなど、当時の家電や家具、約300点を展示する。

開館時間は9時半～12時、14時～16時半で、月曜日は休館。

入場無料。（10月19日）[Weekly 北京ジャピオン]

7 老舎（1899—1966）本名、舒慶春。満州族。中国近現代文学を代表する小説家、劇作家。北京の下町の伝統的な生活に精通。代表作は「駱駝の祥子」、「茶館」など。文化大革命中、紅衛兵運動の対象となり自殺したため、世界に衝撃を与えた。

筆者らはまさしく公開寸前に内情を見せてもらったというわけだ。凌叔華関連の書物などでは長いあいだ、彼女の故居は現在、地域の幼稚園になっていて、部外者は外観しか望めないとされていたが、今回は思わぬ収穫があった。これも経済発展の1つの成果と言えるのだろう。

こうして、中国の文化的な環境整備が整いつつあり、観光スポットも増えている一方で、今回の中国行きでは日中関係が冷え切っているせいか、飛行機も空席が目立ち、特に観光客の姿は少なかった。これは北京、上海の町中でも同じことが言えた。良好な関係の基本は、地道で具体的な相互理解活動にあると思うのだが……。旅行中、北京では雨の降った日の午後に到着したとか、朝のうちに雨が降った日が多かったというような僥倖があって、空気汚染は日本で取りざたされているほどはひどくなかったような気がするのだが、それでも今回初めて中国を訪れた同行者たちはほとんどマスクをかけて過ごすというような状況だった。

経済発展の著しい中国では、現在、文化的なことにも力を入れ、観光産業と結びつけて、伝統的な暮らし方やそれに関連する事物の見直しや保存が進められている。今回、見学した史家胡同博物館もそうした時流の中にあると言える。ただ、1920、30年代に女性らしい細やかな小説作品をたくさん生み出しながら、政治性のなさや新中国から離れて暮っていた経緯から、新中国成立後の文学史の中で長いあいだ高い評価を得られずにいた凌叔華は、魯迅や郭沫若などと異なり、その故居を単独で記念館とするまでには“解放”されていないのかもしれないという印象ももった。